

# 凡例

一、本書は、大学・短期大学における日本古典文学史のテキストとして編集したが、あわせて広く古典文学に関心を寄せる読者のための入門的読本ともなるように配慮した。

二、本書は、古代から中世に至る主要な文学作品をジャンルごとに取り上げ、その本文を抜粋して掲げ、作者等について簡潔な頭注を施した。なお、各時代別、ジャンルごとに、文学史の流れが体系的にとらえられるような平易な解説を加えた。

三、本文は、できるだけ各作品の特色がうかがえるような箇所を選び、「日本古典文学全集」「日本古典文学大系」「日本古典全書」等の本文によって掲出した。ただし、読者の便を考慮して、適宜、句読点、濁点、活用語尾、かぎかっこ（「」）等を補ったところもある。

四、頭注欄には、文学史的理解を助けるために、紙幅の許すかぎり、写本、作者の肖像、各種絵巻・絵本等の関係場面、遺跡写真などを掲げた。図版は複製、複本の存在するものは、それに従い、その他のものは編者架蔵のものに拠った。

五、巻末には、文学史の流れを展望できるように、「年表」「系図」を付した。

六、編集にあたっては、古代を中野・津本、中世を梶原・小林が、それぞれ分担した。

昭和六十二年八月

編者

## 目次

### 一 上代

一、古事記 ..... 3

二、萬葉集 ..... 9

### 二 中古

一、漢詩文 ..... 19

凌雲集 ..... 20

文華秀麗集 ..... 20

経国集 ..... 21

菅家文章 ..... 22

菅家後集 ..... 22

本朝文粹 ..... 23

参考 池亭記 ..... 26

### 二、和歌（一）

古今和歌集 ..... 28

後撰集 ..... 30

拾遺集 ..... 30

新撰万葉集 ..... 31

句題和歌 ..... 33

伊勢集 ..... 34

一条摂政御集 ..... 35

天徳四年内裏歌合 ..... 35

大斎院前の御集 ..... 37

新撰髓脳 ..... 38

曾丹集 ..... 39

貫之集 ..... 40

金葉集	100
詞花集	101
千載集	102
和泉式部集	102
赤染衛門集	103
参考 能因歌枕	103
堀川院御時百首和歌	104
袋草紙	105
古今集 和歌 千九十九首此中長歌五首	105
俊頼髓腦	106
八、物語(二)	108
狭衣物語	109
夜の寢覚	110
浜松中納言物語	112

堤中納言物語	115
とりかへばや物語	118
参考 六条斎院祿子内親王物語歌合	119
九、歴史物語	123
栄花物語	124
大鏡	125
十、説話物語	130
日本国現報善悪霊異記	131
今昔物語集	132
古本説話集	134
江談抄	136
参考 聾瞽指帰	136
三宝絵	137
十二、歌謡	138

本院侍従集	41
古今和歌六帖	42
和漢朗詠集	43
三、物語(一)	44
竹取物語	45
伊勢物語	46
大和物語	48
うつほ物語	50
落窪物語	52
算物語	53
平中物語	55
多武峯少将物語	56
四、日記文学	58
土佐日記	59

蜻蛉日記	60
和泉式部日記	65
紫式部日記	68
更級日記	71
四条宮下野集	73
讃岐典侍日記	74
成尋阿闍梨母集	76
たまきはる	78
参考 入唐求法巡礼行記	80
いほぬし	80
五、枕草子	82
六、源氏物語	89
七、和歌(二)	99
後拾遺集	100

閑居友	200
撰集抄	203
沙石集	205
五、法語	207
選扱本願念仏集	208
歎異抄	209
末燈抄	212
正法眼蔵隋聞記	213
立正安國論	215
撰時鈔	217
消息文	220
播州法語集	222
一言芳談	224
狂雲集	225

六、隨筆・自照の文学	227
方丈記	228
徒然草	231
七、日記・紀行	235
とはずがたり	236
十六夜日記	237
東関紀行	239
海道記	241
八、連歌・連歌論	243
水無瀬三吟百韻	244
菟玖波集	246
新撰菟玖波集	247
新撰犬筑波集	248
僻連抄	250

神楽歌	139
催馬楽	139
梁塵秘抄	141
風俗歌	142
三、中世	145
一、和歌・歌論	145
新古今和歌集	146
山家集	148
金槐和歌集	149
六百番歌合	150
古来風躰抄	152
近代秀歌	153
二、軍記物語	155
保元物語	156

平家物語	158
太平記	164
義経記	167
曾我物語	171
三、歴史物語・史論	175
今鏡	176
増鏡	178
愚管抄卷四	181
神皇正統記	184
四、説話集	187
古事談	188
宇治拾遺物語	190
古今著聞集	193
発心集	196



## 五、枕草子

『枕草子』は随筆文学といわれているが、随筆という文学上の用語は近代のものである。ただ筆にまかせて作者の見聞や感想を書き綴ったこの作品の様式が、たまたま近代のエッセイに相当するというわけである。この種の文学は、平安時代には『枕草子』が唯一のもので文学史上異彩を放っている。

『枕草子』は、長短さまざまの章段およそ三百段から成っている。各章段は内容的に、「一は」「一もの」と書き出して歌枕や物名を列挙した類聚的章段と、自然や人事の鋭い観察や感想を記した随筆的章段と、宮廷生活の経験や感懐・追憶を述べた日記的章段の三つに分類されるが、全体はそれらがいりまじっており、中には連想の糸がつながる段もあるが、ほとんど組織だっていない。独特の鋭い観察眼と簡潔で的確な表現はこの作品の大きな魅力で、作者の恵まれた才気と天分を思わせる。

作者の清少納言は清原元輔の女で、一条帝の中宮定子に仕えたが、主家の没落や中宮の出家に会い、晩年は不遇の中に孤独な生涯を終えたと伝えられている。『枕草子』執筆の頃はすでに主家が没落していたと考えられるが、それにもかかわらずこの作品の随所に散見される主家礼讃の明るい雰囲気は、作者の環境を考慮に入れるとき、また別の味わいを感じられるであろう。

枕草子—清少納言。随筆。長保ごろ成立か。類集、日記的回想、随感など約三〇〇段からなる。正暦から長保にかけて一条天皇の中宮定子に奉仕。

清少納言—生没年未詳。曾祖父に深養父、父は後撰集の撰者清原元輔。夫として橘則光、藤原実方、藤原棟世がいた。『清少納言集』がある。

春は あけぼの。やうやうしるくなり行く山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は 夜。月のころはさらなり、闇もなほ螢のおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ

二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は 夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ

四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音など、はたいふべきにあらず。

冬は つとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きもまたさらでも、

いと寒きに、火など急ぎおこして炭もてわたるも、いとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。(二)

山は 小倉山。鹿背山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。忘れずの山。末の松山。かたさり山こそ、いかならむとをかしけれ。五幡山。かへる山。後瀬の山。朝倉山、よそに見るぞをかしき。おほひれ山もをかし。臨時の祭の舞人などの思ひ出でらるるなるべし。三輪の山、をかし。手向山。待ちかね山。たまさか山。耳なし山。(十二)

夜うちふくるほどに、題出して、女房にも歌よませたまふ。みなけしきばみゆるがし出だすも、宮の御前近くさぶらひて、もの啓しなどことごとをのみいふを、大臣御覧じて、